

2012年12月20日

博士学位論文審査報告書

大学名 早稲田大学
研究科名 人間科学研究科
申請者氏名 桂川 泰典
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目 インタビュー研究における自己語りデータの評価と分析
Evaluation and Analysis of the Self-Narrative Data in Interview Studies
論文審査員 主査 早稲田大学教授 蔵持 不三也 博士（人間科学）（早稲田大学）
副査 早稲田大学教授 鈴木 晶夫 博士（人間科学）（早稲田大学）
副査 早稲田大学准教授 辻内 琢也 博士（医学）（東京大学）
副査 早稲田大学教授 佐々木 和義
副査 早稲田大学教授 菅野 純

論文概説

インタビュー調査において、インフォーマントの語りの背景をいかにして析出するか。序章と本文7章、さらに結論部から構成される本論文は、文化人類学や社会学（とくにエスノメソドロジー）、心理学など、インタビューによるライフストーリーの語り（ナラティブ）分析を基盤とする学問領域が、おそらく本来的に有するこのアポリアと真正面から対峙したまことに意欲的な労作である。U・フリック『質的研究入門』（新版、小田博志監訳、2011年）などにみられるように、インタビュー研究が量的分析から質的分析へと向かうようになってすでに久しいが、そこにはなおも方法的・解釈論的問題が横たわっている。質的研究にありがちな主観的分析という批判もある。こうした問題を乗り越えるため、著者は前記学問領域におけるさまざまな先行研究を批判的に再検討したあとで、首都圏の大学生や専門学校生を対象にインタビュー調査を実施し、回答の語りの深層を析出している。本論文はその分析の成果とそれに基づくインタビュー法の提出を核とする。

論文要旨

まず、本論文序章において、著者はインフォーマントのナラティブ分析が文化人類学や社会学でいうところの「文化の翻訳」に相当するとして、その翻訳作業の困難さを指摘している。インフォーマントの言葉をいかにして取捨選択し、客観的なコーディングを行うことができるか。そして、インタビューデータ自体の「ポリフォニー（多様性・多声性）」と、インフォーマントの記憶の歪みや言葉の選択・創造、虚偽記憶などによる「不確定性」をいかにして克服できるか。そこで筆者は、たとえば前記『質的研究入門』に依拠しながら

ら、質的研究の問題点を次のように列挙する。1. 手順と結果に関する適切な評価基準、2. 研究結果の一般化の可能性と限界、3. 「質」の適正化、4. 手順と結果の記述法。そして、P・リヴァースらのイギリス流機能主義文化人類学が提唱した、現地調査に基づく「内部の視点 (Emic)」によるインタビューデータ分析における主観性や、J・クリフォードらのいわゆるポスト文化人類学者がそうした伝統的なインタビュー調査を批判しながら、ついにそれを乗り越える具体的・実践的な方法論を提示しえなかったことなどを指摘する。もとよりそれは、語りのもつ含意性や恣意性、隠喩ないし換喩性、秘匿性、発現性、さらにインタビュアーとの関係性なども深くかかわるが、筆者はもう一つの分析法、すなわち鈴木淳子らのいう語りの「個人内における共通性・一貫性を重視する」手法にも言及し、その「科学性」を評価しつつ、「原理的にさまざまな矛盾や自己内多様性を含んだインタビューデータの性質」を考慮すれば、結果としては「多くの交絡変数を廃した単純なモデルや要因が選択される可能性が高くなる」とも批判する。

こうして著者はインタビューデータの複層性に着目し、インタビューにつきまとう「多様性」や「不確定性」を生み出す要因である「言語表現」の背後に、その語りの内容や表現形式である「メタ表現」と、言葉として表現されないが、言語表現やメタ表現に作用して、しかしかの語りを立ち上げるコンテクストとしての「非表現」という二重のレベルを想定する。筆者独自の着想によるこの「非表現」情報は、環境変数と心理変数に分類されるという。本論文は大略以上のことを前提として本文に入る。

まず第1章では、78名を対象に、「これまでの人生であった《重要な出来事》と《その時の気持ち》」についてのインタビュー場面を想起させ、インフォーマントによる自由記述調査を通して81項目のメタ思考を収集・分類し(2010年10月)、さらにこのインタビュー時メタ思考を417名に改めてインタビュー場面を想起させ、質問紙調査をした上で(2010年11月～2011年1月)、6件法によるその回答を統計解析(因子分析)を用いて尺度化している(インタビュー時メタ思考尺度)。そして、スクリープロットの減衰と解釈可能性より、インタビューにおけるインフォーマントの心的機制から「評価不安」、「伝達意志」、「情緒的期待」、「ストーリー戦略」、「言語化困難」、「共約不可能性」、「社会的意義」、「場の適切さ」という8因子解を抽出した。

第2章では、第1章で作成されたインタビュー時メタ思考尺度の統計学的な検証(併存的妥当性、内的整合性、再検査信頼性)を行っている。ここでも著者は首都圏内の学生209名にインタビュー場面想起による質問紙調査を試み(2011年1・2月)、「私的自己意識」、「公的自己意識」、「社会的不安」の3因子の性格特性からなる「自己意識尺度」とインタビュー時メタ思考尺度との相関を分析している。そして、インフォーマントの研究協力動機によってインタビュー時メタ思考の傾向に有意な差がみられたところから、この動機によって語りの内容にも差が生じる可能性があるとする。

第3章では、インタビュー時メタ思考尺度を実験的なライフストーリー・インタビューに適用し、実際のインタビューにおいてこの構成概念がどの程度生起するかを、その生態

学的妥当性から確認・改訂している。ここでは著者が自らインタビュアー／インフォーマントの16ペアを編成し、各ペアにそれぞれ3回、合計48セッションのライフストーリー・インタビューを実施させ（2011年9月～2012年3月）、その回答からメタ思考の5因子、すなわち「ストーリー戦略」、「伝達意志」、「協働的インタビュー形成」、「自己開示不安」、「言語化困難」を析出している。

さらに第4章では、前章で確認・改訂されたメタ思考尺度を用いて、実際のインタビューでインフォーマントがどのようにメタ思考を組み合わせているかを再確認している。そしてその結果から、インフォーマントを「関係／構築型」（自己開示への不安が高く、インタビュアーの見解を参照しながら回答を構成するタイプ）と、「自己／再現型」（自己開示の不安が少なく、時に困難を覚えながらも自らの意見を正確に伝達しようとするタイプ）とに分類し、インタビューデータの対話構築性がインタビュー研究という手法のみならず、インタビュー時メタ思考からみたインフォーマントのタイプによって規定されるとする仮説を提示する。

第5章では、日本版セッション評価尺度（J-SEQ）を用いて、実験的なライフストーリー・インタビューの評価を行い、インタビューでは面接の「深さ」と「充実感」、「明確さ」と「肯定感」が必ずしもひとつのまとまりとならないことを指摘し、インフォーマントのインタビュー時メタ思考を把握することで、インタビュアーの一方的な思い込みによるインタビュー評価を防ぐことができると指摘する。

第6章では、第4章で分類したインフォーマント・タイプごとに「逐語録」の類型化を行っている。そこでは榎本博明が「語りを素材に自己をとらえる」（榎本・岡田務編著『自己心理学1』、2008年）で提唱した類型に基づいて、逐語録を8パターンに分け、その出現頻度を統計的に解析し、インフォーマント・タイプ（インタビュー時メタ思考の個人内パターン）によって語りの内容が影響を受けるか否かを確認している。と同時に、その語りの物語的統合がみられるかどうかを検証している。

第7章では、前章まで考察してきた「非表現」の心理変数と強くかかわる環境変数を取りあげる。ここではシカゴ社会学のライフストーリー研究や実験心理学から派生した自伝的記憶研究における自己語りデータを、「内言的モノログ」、「ダイアログ」、「外言化されたモノログ」の枠組みで整理し、多くのモノログがじつは「外言的モノログ」の性質を帯びていることを指摘する。さらに著者は、語りの場で環境変数がインタビュー時メタ思考や語りの内容にどのような影響を与えるかを知るため、インフォーマントに同一テーマのライフストーリーを、「外言的モノログ」とダイアログという2通りの環境で語ってもらい、そのインタビュー時メタ思考および逐語録データを分析している。

以上の実験と分析から、著者はインタビューを用いた質的研究のアポリアに対する解決策を提示する。インタビュー時メタ思考という構成概念を導入しての、インタビューにおける多様性や不確定性の因となる「非表現」情報の可視化、インフォーマントの「関係／構築型」ないし「自己／再現型」を勘案してのインタビューによる語りの内容の安定的か

つ確実な評価の可能性、さらに「非表現」の「環境変数」に分類されるモノログとダイアログによって語りが変化すること、さらにインフォーマントが過去体験の意味づけを重視する場合には、語り直しが起きやすいダイアログが、過去の時点における体験の意味を把握しようとする場合にはモノログが有効であるとする。そして、こうした「非表現」を踏まえたインタビュー内容の分析を行うことで、語りの「多様性」や「不確定性」を客観的に位置づけることができ、語りの過剰な一般化や過小評価が防げるとともに、インタビューデザインの適切な設計も可能になると結論づける。

論文評価

本論文の最大の特徴は、インフォーマントの語りの深層である「非表現」をいかにして可視化し、それにはいかなるインタビュー法が有効かを提示したところにある。そのため、著者はインタビュー時メタ思考をキーワードとして、細心かつ度重なるインタビュー調査によるデータを分析し、それを通して独自の用語や概念を提示する一方、考証や考察を適宜端的かつ精緻な表やグラフにまとめながら展開する。その論述は、簡潔な文体とあいまってまことにダイナミックであり、説得力に溢れている。加えて、本論文で縷々披瀝した方法論は文化人類学や社会学、さらに心理学のインタビュー調査法にも重要な影響を与えるはずであり、そのかぎりにおいて斯界への貢献度はきわめて大なるものといえるだろう。

以上のことに鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認めるものである。

なお、本論文（一部）が掲載された主な学術論文は以下の通りである。

- (1) 桂川泰典：「インタビューにおける複層的インフォーマント理解の試み—大学生のインタビュー時メタ思考の分析から—」、《情報文化学会誌》18(2) 35-44、2011年
- (2) 桂川泰典・国里 愛彦・菅野 純・佐々木 和義：「日本語版セッション評価尺度（The Japanese Session Evaluation Questionnaire：J-SEQ）作成の試み」、《パーソナリティ研究》22（1）（印刷中）

以上